

STEP UP!! DANCE CLUB

ダンス部新時代、突入!

文 石原久佳

おかげさまで『ダンスク』が創刊から1年が経った。その間にも、いくつものダンス部への訪問取材や、コンテストやイベント取材、そして、ダンス部顧問の先生や部員へのインタビューを通じて、さまざまなことを学び、感じ取り、誌面作りに反映させていただいた。そして、この1年の間にもダンス部周辺にはさまざまな変化・進化が訪れているように思う。今回は、創刊1年を機にダンス部周辺の最新事情についてまとめてみたい。

大会の増加と統一基準の遅れ

以前からお伝えしている通り、ダンス部の大会は増え続けている。昨年は、渋谷区が協力する大会や神奈川県が主催する大会が開催されるなど、行政が取り組む大会も見られ、ダンス部への社会的な注目度の高まりも感じさせる。また、ストリートダンス系のイベントでも「高校生部門」が新設されるなど、その盛り上がりと集客には期待が寄せ

を強めていけば、新しい「学校の自慢」として、ダンス部目当ての入学生が増えるかもしれない。そうなれば、近い将来に「ダンススタジオ完備!」と謳う学校が出てきてもおかしくないだろう。

強いダンス部の裏側を見れば、当然「強くなれる練習」がある。野球やサッカーのように熟練の指導者がおらず歴史の浅いダンス部の中で、いち早く頭一つ抜けるためには、いかに「強くなれるシステム」を構築し、それを伝統として太く形作っていくかにかかっているとされる。

筆者が見たところ、強いダンス部には「無駄がない」と「お互いを見合っている」傾向がある。前者は、練習方法に無駄がない、時間の使い方に無駄がない、人間関係や上下関係に無駄がない、振り付けに無駄がない。要は、どれだけ詰め込むかではなく、何を捨てるか、という判断ができるかというのは、ダンスの作品作りにおいても、あるいは人生の選択においても重要なことだ。「自分たちを出す」という目的をはき違えて、できることを全部やってしまったり、作品としてはとりとめのないものになってしまうが、実際のところ、2分弱で伝えられることは演者が思うよりも多くない。「選択と集中」——これを限られた練習時間の段階から意識できるのが重要なのだ。

後者の「お互いを見合っている」というのは、つまるところ「人との向き合い方」にも関わってくる問題だ。例えば、皆でフリを合わせていけば、なかなか合わないメンバーが2〜3人出てくるのは当然だろう。それを見て見ぬ振りをするのか、即座に指摘し合えるのかで、強い組織になれるか否かが決まってくる。ダンスチームでは個人プレイは通用しない。皆でできるレベルを揃え、強いチームワークを作るために、お互いに向き合い、腹を割った関係を作れているかどうか、真の強さなのだ、良い部活現場から学び取ることができる。

ダンス部にありがちな弱点

弱点と言えば、前述に関連した思春期の女子ならではの人間関係の難しさがつきものであること。まずは、その部



られている。最大規模で開催されているダンススタジアムは予選を拡大し、昨年は決勝大会のみの開催だった「全国高等学校ダンス部選手権(DCC)」も今年は地方予選を追加している。その他にも、本誌が把握できないほど地方での大会が増え、大会の規模自体も拡大しているようだ。

ただし、依然として「審査基準」や「大会規定」の足並みが揃わないどころか、さらに多様化しているように感じられる。もちろん、各大会が「高校生のダンス大会」として熟考した末の基準であるからその違いなのだろうが、実際に戸惑ってしまうのは参加する学校側だ。筆者が取材した学校からは「〇〇の大会は審査員が思わしくない」「△△の大会基準は、うちのスタイルは評価されないから出ない」などの正直な意見も耳にした。

通常の学校ならば、ほとんどはスケジュールや人数規定によって出る大会を決めるようだが、強豪校の場合は「出るからには勝ちたい・勝たせたい」。だから当然、大会選びとその傾向と対策を練るはず。大会側としては、より明確な審査基準の打ち出しと、審査員の事前公表くらいはやっていただきたいところだ。

また、審査員にストリート系のダンサーが選ばれるケースは多いが、そのダンサーが「PO」をわかまえている社会人なのかは、主催者側が慎重に見極めていただきたい。もはや、前時代的なストリートマナーの出で立ちと言動で自分らしさを主張するダンサーは、ダンス部大会の審査員にふさわしくない時代だと感じる。

強くなれるシステムを作る

本誌の取材を通じて年間に20以上のダンス部への訪問取材を得た。訪れる学校は、強豪校や個性的で印象に残る作品の学校が多いのだが、当初に想像していたよりも、練習環境は恵まれているようだ。鏡が完備されているところはまだ少ないが、移動式の鏡を年々の部費で増やしていったり、部員の増加に応じて練習場所が確保されていたり、ダンス部への学校側の理解や顧問の先生の頑張りを感じさせる。

ダンス部が華やかで明るい存在としますますアピール分をいかに一人一人が大人になって早く解決できるか。部にとっての無駄をなくせるか。

また、ダンサーとして見た場合、体幹や下半身の弱さが傾向として見られる。ダンス経験やスポーツ経験の少なさによって生じてしまうものだが、たとえばヒップホップをやった場合に、踏ん張りや軸が効いていないために、身体全体のグライントがでず、ヒップホップならではのグルーブ感がなかなか創出できていない傾向がある。

これは単純に練習で克服できる。練習時間の半分以上を、体カトレーニングやアイソレーションや基礎ステップにあてれば良いだけなのだ。ダンス練習や振り付けに入る前に、まずはフィジカル作り。強靱な身体で地盤ができれば、単純なステップだけでも魅せ切ることができる。これはスポーツ指導に関しても同様で、日本は欧米に比べて身体作りの意識が弱いようだ。テクニクの前に、パワーとスピード。筋トレやアイソレを本練習に入る前の準備体操程度に考えていてはいけないのだ。

さらに、弱点というが良くない傾向として感じるのが「音」への意識の低さだ。単純に、明らかに音質が劣化している音源を大会で使っており、前後のチームに比べて作品として見劣りしてしまっている。元音源の圧縮具合など、詳しい人間に聞くなどして十分に注意を払いたい。YouTubeから取った音源などはもってのほかだ。

バトルの可能性と「ダンス部男子」の奮闘

ダンス部と言えば、女子の世界。たまた、男子部員が練習場の片隅で奮闘している姿を見るくらいだが、これが大学サークルになると一気に男子ダンサーが増えていく。単に、男子にとってのきっかけと活躍の場所が高校ダンスに少ないにすぎないと思われるのだが、昨年末に行なわれた高校ダンス部のバトル大会では、元気に活躍する男子ダンス部員の姿が多く見られた。そのほとんどがブレイクダンス系なのだが、若さと体力に溢れる男子にとって、バトルとブレイクで目立てる場所があるなら、今後は一気に人口が増えていく可能性はある。ある大会でのDJタイムでも、我